

はじめに 書くことの祝福 理事長 池田勇人

なぜ書くのか、そこにはどのような祝福があるのでしょうか。

なぜ山に登るのか、それはそこに山があるからだ—これは名言だと言われていますが、何も難しい理屈をつけることなく、山登りの楽しさを体でわかっているから、というだけでしょう。

書くことも同じように、書くことで自分を素直に表現できたり、気づかなかった自分の思いに気づかされたりと、要するに書く楽しさを知ったら、書かすにはいられない、ということなのです。もちろんもっとわかりやすくてか、いつまでに字数はどれくらいでと制限されると、プレッシャーがかかって苦しむことになりました。でもその辛い峠を越え、野原や海が目前に開けて……という爽快さを何度か味わうと、たとい長い苦しみにも悶えようとも忍耐できてゆくようになるのです。

「誰がほめようと／誰がけなそうと／どうでも良いのです／畑から帰ってきた母ができたがった私の絵を見て／「へえっ」とひと声／驚いてくれたら／それでももう十分なのです」(星野富弘)

驚くという中に母の喜びを見つけて、富弘さんは口に筆をくわえて、根気よく書き続けていったのでしょう。その一筆一筆が母への感謝と愛の表現でした。今は奥さんがその対象ですけれど。

さて、書くことで自分を見つめ直すことができる、これが第一の祝福でしょう。どうか思い迷っている方は、そのまま書き留めてみてください。必ず光が差して来ますから。

漠然とした地に光が差すと（創世記一章23節）昼と夜が区別され、季節が生まれて来ました。祝福の第二は、バラバラだったものが整理され、まとめられ、言葉が紡（つむ）がれているということです。どう書いていてよいかわからなかったのに、書いているうちにペンが動いてくれるというような体験もきつとあるはず。

第三に、書いたものは残されて、後の時代の人達もその恩恵にあずかれるということ。その良い例が二千年の時を経て発見された死海写本です。そこまで行かずとも、子や孫に愛を残せたら……と思います。